

# 西田中遺跡

第1・2次発掘調査概要報告



1985.3. 大和郡山市教育委員会

## 序 文

大和郡山市教育委員会では、文化財保護行政の一施策として、昭和58年度から埋蔵文化財の発掘調査を積極的に実施しており、これまで十数ヶ所の遺跡調査を行い多くの成果を収めています。

ここにその概要を報告する西田中遺跡は、都市計画道路の建設に先立って調査を実施したものであり、弥生時代中頃の竪穴式住居跡が発見されるなど、県下でも例の少ない弥生時代の丘陵性集落であることが判明しました。

今後は、このような貴重な成果を専門の研究者の方々や市民の皆さんに公表し、遺跡の保護・保存に対してご理解いただけるよう報告書や普及書の作成に努力せねばなりません。

市教育委員会の調査・研究体制に不備な点もあり、本書の内容も市民の皆さん方の期待に答えられるものではございませんが、こうした作業を地道に積み重ねていくことが、私どものふるさと“こおりやま”の古代史を明らかにしていくものと信じております。

昭和60年3月

大和郡山市教育委員会

教育長 堀 口 喬 三

## 例　言

- 本書は、大和郡山市西田中町・新町に所在する西田中遺跡の第1次調査および第2次調査の概要を収める。
- 調査は、都市計画街路小泉西田中線建設工事に伴う事前調査として実施し、教育委員会技師服部伊久男が現地を担当した。
- 調査費は、原因者の都市建設部計画課が負担した。
- 調査期間、調査面積は下記の通りである。

第1次調査 約 750 m<sup>2</sup> '83. 9. 2 ~ '83. 9. 29

第2次調査 約 650 m<sup>2</sup> '84. 10. 1 ~ '85. 3. 30

- 調査に際しては、奈良県立橿原考古学研究所より御指導をいただき、また現地作業は株式会社浅川組（代表浅川正享）のお世話になった。記して感謝したい。

また、調査・整理には下記の補助員の参加を得た。

米田肇（大阪市立大学）、木寅孝次（大阪工業大学）、吉村克俊（近畿大学）、徳芳郎（同志社大学）、なお、一部トレスに川上奈理子氏（橿原考古学研究所）の御支援を賜った。

- 本書の執筆・編集は服部が担当した。

## 本文目次

I.	調査の契機と経過	(1)
II.	位置と環境	(2)
III.	第1次調査の概要	(5)
1.	遺構	(6)
2.	遺物	(9)
IV.	第2次調査の概要	(12)
1.	遺構	(13)
2.	遺物	(15)
V.	まとめ	(18)
付載 1.	六道山遺跡採集の弥生式土器	(20)

## 挿図目次

- 図1. 西田中遺跡位置図
- 図2. 調査地周辺の遺跡分布図
- 図3. 第1次調査区
- 図4. S I - 01・S I - 02 平面図
- 図5. 第1次調査区内遺構平面図
- 図6. 第1次調査出土遺物 I
- 図7. 第1次調査出土遺物 II
- 図8. 第2次調査区
- 図9. S I - 03・S I - 04 平面図
- 図10. 第2次調査区内遺構平面図
- 図11. 第2次調査出土遺物 I
- 図12. 第2次調査出土遺物 II
- 図13. 六道山遺跡位置図
- 図14. 六道山遺跡採集土器実測図
- 図15. 六道山遺跡採集地点
- 図16. 六道山遺跡採集土器

## 表目次

- 表1. 六道山遺跡出土土器観察表

## 図版目次

### 西田中遺跡第1次調査

- 図版 1. (a). 調査区全景（南から）  
(b). S I - 01・S I - 02 全景（南から）
- 図版 2. (a). S I - 01・S I - 02 細景（北西から）  
(b). S K - 12 土層堆積状況（西から）
- 図版 3. (a). 20～25区全景（北から）  
(b). 24～25区ピット群（北東から）

### 西田中遺跡第2次調査

- 図版 4. (a). 調査区前景（南から）  
(b). 調査風景
- 図版 5. (a). S I - 03・S I - 04 全景（北から）  
(b). S K - 21 全景（北から）
- 図版 6. (a). S I - 03 周壁部（北西から）  
(b). S I - 03 炉址断面（北から）

## I. 調査の契機と経過

西田中遺跡は、大和盆地の北西部にある矢田丘陵の東南裾部の一画を占める低丘陵地に立地する弥生時代の遺跡であり、以前から弥生式土器やサヌカイトの散布地として知られている周知の埋蔵<sup>註①</sup>文化財包蔵地である。周辺には新興住宅地が広がりつつあるが、遺跡推定地の一带は、果樹園や畑として利用されているのみで、大きな破壊行為は受けていない。ところが、近年の道路網の整備事業の余勢を受け、西田中遺跡の推定範囲内にも都市計画街路が計画されるに至る。幅員12mの大形道路であり遺跡の破壊は確実であった。そのため、奈良県教育委員会文化財保存課・大和郡山市教育委員会・同計画課が事前協議を重ね、とりあえず試掘調査を実施し、その結果本調査が必要かどうか判断するに至った。また、発掘調査は市教委が担当することになり、調査日程や調査費用等の具体的な事項については市教委と計画課が打ち合せを行った。結果的に調査は2年度に分けて実施し、第1次調査は道路予定地の南半分約1,700 m<sup>2</sup>を対象とし、第2次調査は残る約1,100 m<sup>2</sup>を対象として行った。



図1. 西田中遺跡位置図

## II. 位置と環境

西田中遺跡が立地する丘陵地は、奈良盆地の北西部に位置する。この矢田丘陵の東南部一帯を占める大和郡山市小泉町・泉原町・矢田山町・西田中町・千日町・外川町は比高5~20mを測る低丘陵であり、東側を富雄川が南流し、丘陵の間をぬって沖台川・芦川が富雄川に合流する。こうした河川に分断されるような形で残る低丘陵地に数多くの遺跡が存在している。西田中遺跡もその一つであり、借景庭園で有名な茶道石洲流家元・慈光院から約500mほど北上した位置にあたる。この位置は、後に述べる割塚古墳・新木丸山古墳をはじめ、郡山城がある西ノ京丘陵南端部や天理方面に眺望がきく。さて、西田中遺跡を中心に、斑鳩地方をも含めて富雄川流域の遺跡を概観しておこう。

縄文時代の遺跡は、斑鳩町の西里遺跡<sup>①</sup>以外は知られていないが、弥生時代に至ると急激に増加する。西田中遺跡・慈光院裏山遺跡・古屋敷遺跡・満願寺遺跡・小泉遺跡・外川遺跡・六条山遺跡・菩提山遺跡等である。実体の知れる遺跡は少ないが、大略弥生中期に展開する集落が多く、また特に丘陵性の遺跡群として注目される。小泉遺跡では弥生中期の方形周溝状の遺構が検出されており、六条山遺跡は、高地性集落とも考えられる後期の集落跡で、堅穴住居が5棟検出されている。<sup>②</sup>

古墳時代に入ると丘陵の先端部分を中心前に前期~後期にかけて大形古墳が出現する。前期では、特異な合掌式竪穴式石室を内部主体とする小泉大塚古墳・帆立貝式の墳丘をもつ六道山古墳・漢式鏡・筒形銅器などを出土した円墳の斑鳩大塚古墳があり、やや離れた位置に径49mの大形円墳・富雄丸山古墳が存在する。中期では、魚形土製品を出土した前方後円墳の瓦堀1号墳、全長約47mの前方後円墳駒塚古墳や戸垣山古墳・藤の木古墳がある。後期では、金銅製垂飾付耳飾の出土で有名な割塚古墳・前方後円墳の小泉東孤塚がある。新木丸山古墳は周濠をもつ全長約123mの前方後円墳で、西ノ京丘陵の南端に立地する。この地域では群集墳は発達しないが、三井古墳群・樋崎古墳群の存在が注意される。最近調査された笛尾古墳は、盆地内でも有数の大形横穴式石室墳で、斑鳩町の仏塚古墳とともに石室変遷の良好な資料となった。終末期に属する竜田御坊山3号墳は、漆塗陶棺の中に三彩有蓋円面鏡・琥珀製枕が副葬されていた。

1. 富雄丸山古墳
2. 六条山遺跡
3. 城古墳群
4. 割塚古墳
5. 古屋敷遺跡
11. 六道山古墳
12. 小泉大塚古墳
13. 笛尾古墳
14. 小泉東孤塚
15. 小泉城
21. 西里遺跡
22. 法隆寺
23. 御坊山古墳群
24. 藤ノ木古墳
25. 斑鳩大塚古墳
31. 松尾寺
32. 筒井城
33. 平城京
34. 郡山城



図2 調査地周辺の遺跡分布図

- |            |           |           |             |           |
|------------|-----------|-----------|-------------|-----------|
| 6. 新木丸山古墳  | 7. 稗田遺跡   | 8. 津舟遺跡   | 9. 満願寺遺跡    | 10. 西田中遺跡 |
| 16. 法起寺南遺跡 | 17. 瓦塚古墳群 | 18. 三井古墳群 | 19. 穂崎古墳群   | 20. 仏塚古墳  |
| 26. 酒ノ免遺跡  | 27. 駒塚古墳  | 28. 東福寺遺跡 | 29. 頼田部狐塚古墳 | 30. 松山古墳  |

<sup>註◎</sup> 古墳時代の集落址では、酒ノ免遺跡・法起寺南遺跡がある。両方とも掘立柱建物で構成される居住跡である。また、津舟遺跡は今後の調査に期待されるところであろう。

<sup>註◎</sup> 7・8世紀には、法隆寺を中心に多くの寺院が建立される。中宮寺・法輪寺・法起寺・高安寺などであり、中でも標高約250mの高所に立地する松尾寺が注目される。また、三井瓦窯は、斑鳩の諸寺院の所用瓦を供給した窯址で、現在国の史跡に指定されている。

<sup>註◎</sup> 中世室町時代には、大乘院方衆徒小泉氏により小泉城が築れる。丘陵の先部を利用した平城であり、現在も堀の痕跡がよく残っている。一方、筒井順慶の大和統一の本拠となつた筒井城は、やがて近世城郭の威容を誇る郡山城として発展していく。

以上のように、矢田丘陵、西ノ京丘陵の南端周縁部を占める大和郡山市北西部・斑鳩町域には重要な遺跡が多いが、全体的にみた遺跡の数は少なく、今後の多方面からの調査に期待されるところである。

### III. 第1次調査の概要

昭和58年度に予定された調査範囲は、西田中ポンプ場から北側へ約150mの区間である。調査はさらに北側の丘陵が水田に連なる部分まで実施する予定であり、昭和58年度の調査を第1次調査、昭和59年度調査を第2次調査とした。

また、検出遺構や出土遺物の取り上げ作業を統一的に実施するために地区割を行った。道路センター・ラインを基準に、調査区の全域をカバーできるように、4mピッチで南北軸に南から順に1・2……の算用数字を付し、東西軸は西から順にA・B・C……を付した。基本的に $4 \times 4$ mの方眼を一小区とし、地区名は北西隅の割杭番号を当て、また地区割は第2次調査にも適用するものとした。

試掘調査の結果、丘陵の最高所から北側では遺構の検出が多く本調査を実施したもの、南半部の1~13区では遺構がほとんど認められなかったため幅4mの試掘調査にとどめておいた。



図3 第1次調査区

調査区全体の層序は単純で、I：表土、II：褐色土層、III：地山の層序である。近世～現代の畠の開墾や雨水による流出等で地山面が削平され、表土直下の地山面で遺構を検出する場合が多く、包含層である第II層の褐色土層は24～25区に認められただけである。調査区の16～18区が標高約68mの最高所であり、26～29区は北側へゆるく傾斜し、ごく浅い谷状地となる。その比高差は約2mである。地山は黄色土層で部分的に砂礫層が形成されている。水はけがよく、調査開始から続いた好天で検出面が乾燥し、連日撒水措置を構じなければならなかつた。調査は、残暑きびしい9月2日に開始し、10月29日に終了した。費した日数はのべ40日間である。

### 1. 遺構

1～29区の調査区で検出した遺構のほとんどは弥生時代に属するものである。堅穴住居とそれに伴う外溝・炉址、土坑、ピット群などが主要な遺構である。包含層は部分的に認められ、多量の土器を含んでいた。また、弥生時代の包含層の上部に古墳時代後期の薄い包含層が28～29区に認められた。以下、主要な遺構について説明を加える。

S I - 01 は、不整円形プランの平面形態をもつ弥生中期後半の住居址で、全体の約1%を検出した。床面まで削平されており、わずかに遺存する周壁溝により規模を推定することができる。床面積は30m<sup>2</sup>ほどにならうか。住居中央に約60×60cm、深さ約40cmの不整形なピットがある。炉址とも推定されるが、焼土や灰層が検出されていないので、一応“中央ピット”という名称で把えておきたい。この中央ピットから北東方向に、上端幅約15cm、深さ約10cmの外溝がのびる。断面は逆台形で、約9mほど続き、北側で若干幅広のピット状となり終結する。北側の方が溝底のレベルが低く、排水を目的としたものと考えられる。また住居内部では一種の間仕切り施設として利用されたかもしれない。柱穴は、主柱穴と思われるものを2基検出した。4本柱による主柱構造であろう。床面は、地山削土の小礫を混じえる土で敷く。この張床上面で中央ピット、外溝、柱穴を確認している。

S I - 02 も同じく中期の堅穴住居址である。部分的に残る周壁溝から径約8mの円形プランを復元できる。中央に炉があり、約1.1m×0.8m、深さ約0.2mをはかる。下層に厚さ約0.1mの灰層が堆積し、灰層内からサヌカイトの剥片が多数出土している。炉址からは北東方向に外溝がのびており、約6m分検出した。規模はS I - 01 のものとほぼ同じである。炉の周辺には、径約0.4m、深度約0.3mの一定した柱穴が4基あり、主柱穴と考えられる。ただ、この柱穴間の距離は約2mと狭く、上屋根を十分支えられるかどうか不明であり、周壁との間にさらに支柱の存在を認めた方が妥当であろう。主柱穴や支柱穴の状況からみて、数回の建替が行われている。S I - 01 と同じく床面まで削平されているため出土遺物も少ない。S I - 01 に後出し、S I - 02 の南西隅部がS I - 01 の北東隅部を切る。

土坑は、約20基検出した。全体として不整形なものが多く、平面形態・深度も一定しない。また、

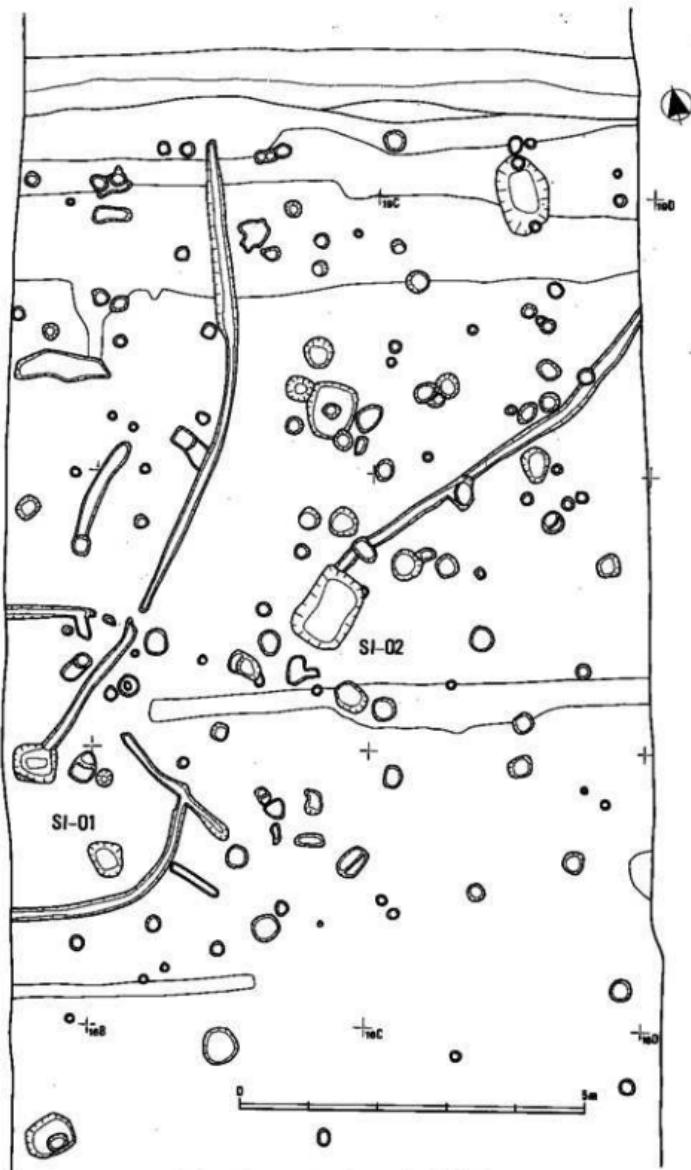


図4. SI-01・SI-02平面図

出土遺物も少なく、その用途・機能も特定できない。

SK-01は、竪穴式住居SI-02の北側で検出した。約0.7×0.8m、深さ約0.3mの不整円形の平面形をもつ。堆積土は黒褐色土で、遺物はごく微量である。SI-02との共存関係は明らかではないが、SI-02の周壁に接する位置にあるため、住居内に設けられた施設とする解釈もあり立つ。SK-02もSK-01とはほぼ同じ形態をもつ。SK-04・05は、隅丸長方形の平面形で、深さは約0.2mと浅い。SK-10は、直径約1.6mの円形プランで、深さも1.2mと深い。上部堆積の約0.5mは人為的に埋められていた。SK-11・20は径約1.0mの平面円形プランをもつ。SK-11の坑底には灰層が厚さ約0.1mにわたり堆積していた。SK-20は深度約1.0mを測り、坑底も平坦で逆台形の断面形態をもつ。SK-12は、長軸約1.3mの橢円形平面をもち、深度約0.3mを測る。坑底には黒灰色の灰層が厚さ0.1～0.2mにわたり形成されている。この堆積状況は、SI-02の炉址と共通している。ただ、SK-12検出地点では住居址を復元できるような一定のまとまりをもった柱穴を検出していないので、屋内地床炉とするには無理であり、あるいは、屋外炉の可能性を指摘しておきたい。SK-14・15・16は、性格が判然としない。これらを検出した調査区25～29区は、周辺より一段低くなり東側に向って開く浅い谷状の地形を呈するところである。いずれも東西一南北方向を主に溝状に走る。深度も浅いので凹地に堆積した包含層とともにできるが、注意深く観察すると、方形周溝状に回る様子が看取され、また、後述する24～25区のピット群を明らかにさける形でつくられているので一応土坑として取扱っておきたい。ここからは多量の弥生中期の土器片が出土している。

20～22調査区、および24～25区ではピット群を検出している。20・21区で検出したピットは24・25区のピットより小規模で径約20cmをはかるものが多い。24～25区にもピット群がある。径約0.3m、深度約0.5mほどのピットが多い。この地区には暗褐色の包含層が厚さ約0.2mにわたり認められており、こうしたピット群は比較的プライマリーな状況を保っていると考えられる。ピット相互の位置関係は煩雑で一定の明確なまとまりは看取し難いが、24区の中央部分では径約3.5mにわたり弧状に展開している状態が認められる。この一連のピット群の横には、灰層の堆積をみるSK-12がある。両者の関係に、主柱と偏在炉を想定することもできようが、周壁部が検出されていないので、また、特殊な構造物を復元し得る可能性もあり、類例の増加をまって判断したいと思う。

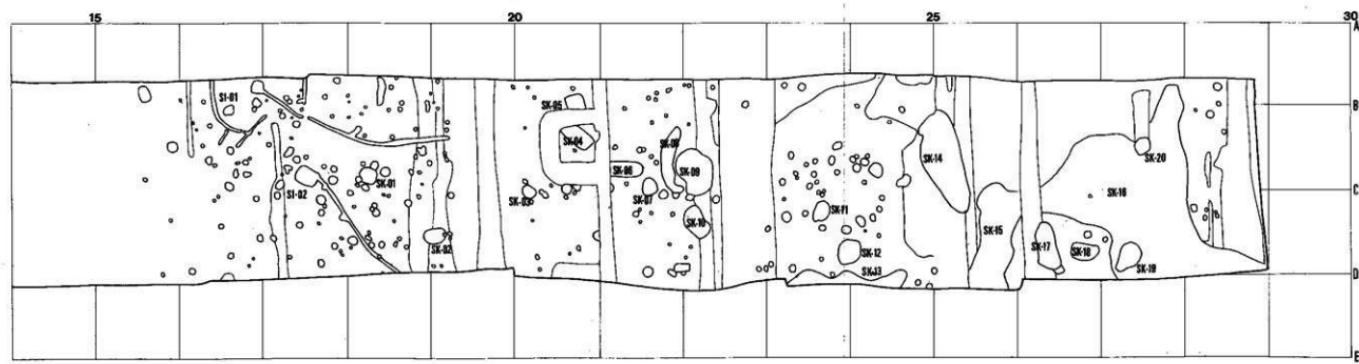
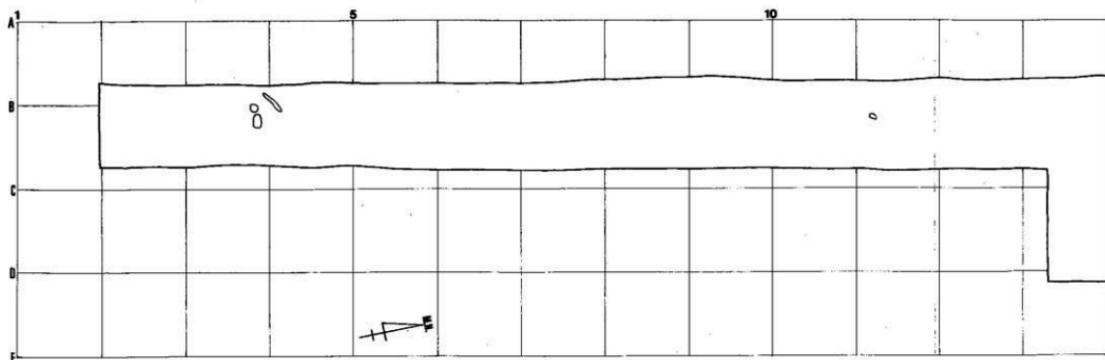


図5 第1次調査区内造構平面図（方眼は4×4M）

## 2. 遺 物

今回の調査で出土した遺物は、通常のコンテナパットで約50箱を数える。弥生式土器（中期）が大半を占めるが、調査区全域にわたる後世の削平が原因となり、良好な一括資料は少ない。最も多量に出土したのは、SK-14～16である。櫛描直線文をもつ土器が多く、他に簾状文・扇形文・刺突文・波状文等の文様が認められ、その多くが単帶構成をとる。断面三角形突帯や指頭圧痕文突帯をもつ土器もあり、凹線文・叩き目を施す断片も少量みうけられる。中期後半に属するものであろう。他の遺構から出土する土器も、これらとはほぼ同時期のものであり、西田中遺跡の経営期間の中<sup>註④</sup>心が想定できる。また、數点ではあるが生駒山西麓産の胎土をもつ土器も出土している。石器は約50点で、石包丁・石鎌・石槍・敲石・砥石がみられる。また、不定形な石材が多数出土しているが用途は不明である。

28・29区の古墳時代の包含層からは、須恵器・杯蓋・土師器の甕が出土している。6世紀後半に比定できる資料であり、古墳時代後期になってこの地域に小規模な集落が営まれたことが推定される。<sup>註⑤</sup>

土器は、図6-1～6、図7-9～12に示す。

1は、復元口径約27.0cmの広口壺口縁部断片。口縁部は水平に折れ上下方に肥厚する。特に下方への垂下が著しい。端面に幅広の凹線文を施し、径約0.8cmの円形浮文を貼付する。浮文の構成単位は不明。SI-01の周壁溝から出土した。中期後半。2は、復元口径約19cmの広口壺口縁部。端部が上・下方に大きく拡張される。端面には刺突文・簾状文を施し、円形浮文を貼付する。浮文の構成単位は明らかではない。生駒山西麓産の胎土をもつ。SK-16出土。3は、細頸壺の体部で、

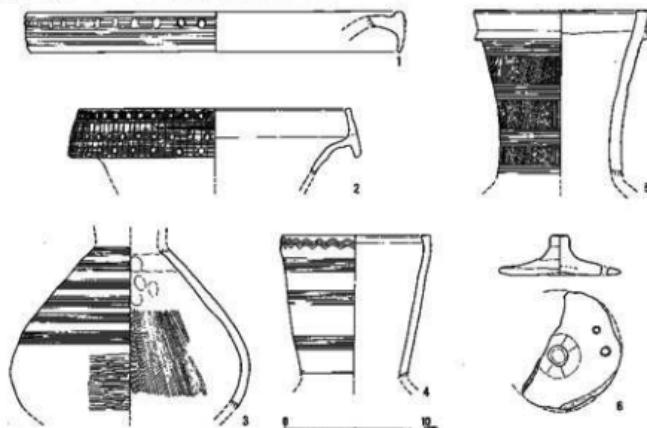


図6 第1次調査出土遺物I. (1/4) 1. SI-01周壁溝 2～4. SK-16

体径約17.0 cmを測る。胴は下位で最大に張る。体部上半にはナデ調整の後、幅約1.0 cmの櫛描直線文を6条施す。下半部にはヘラミガキを認める。内面は継位の細かいハケメで調整する。淡黄橙色。SK-16出土。4・5は長頸壺形土器の口頸部断片。4は復元口径約10.5 cmを測り、口縁部は外上方に直上し水平端面を形成する。外面には1条の波状文、3条の櫛描直線文を施す。文様帶間はナデ調整。淡橙色。SK-16出土。5は復元口径約12.5 cm。頸部は外反気味に直上し、端部は面をなす。端部直下に1条の三角形突帯を廻す。外面は継位のハケ後、 $9\frac{1}{2}$  条/cmの櫛描直線文を施す。内面はナデ調整。橙色を呈し、SK-15出土。6は壺・蓋であり、扁平な口縁に乳頭状のつまみが付く形態。径約8.6 cm、高約2.8 cmを測る。調整はナデが主体。2孔1対の紐孔をもつ。灰褐色を呈する。SK-09出土。9~12はSK-16出土。9は壺の頸部破片で、写真は天地逆である。4条の三角突帯の上に棒状浮文を施す。10~12は鉢の口縁部。10・12は段状口縁が発達する。

石器は、図7-1~8に示す。

1は平基無茎鐵で、長約3.6 cm、幅約1.7 cm、厚約4.0 cmを測る。2は石錐で、長約5.2 cm、厚約0.8 cm。3は緑色片岩製の直線刃石包丁。紐孔は遺存しない。4・5は、石槍で、4は自然破碎面の基部が遺存し、5は槍身中位の断片。両方とも幅約3.5 cmを測る。6は円形削器。7・8は用途不明の石材。7は自然石と思われるが、8は成形痕をもつ。赤茶色を呈する石材で、こうした石片が多数出土している。

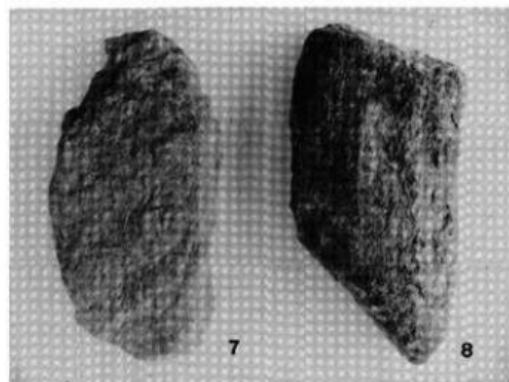
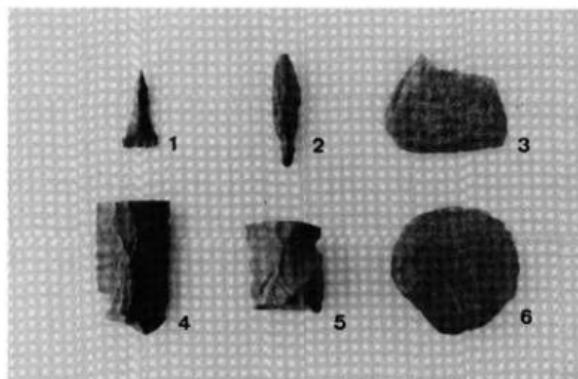
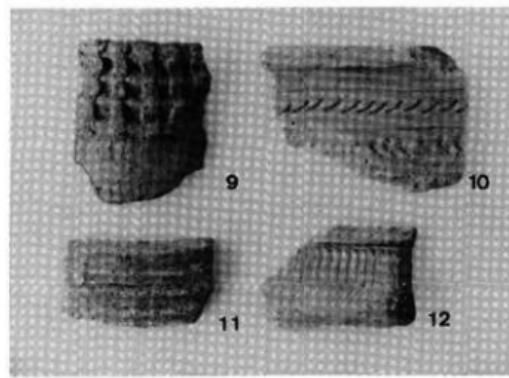


図7 第1次調査出土遺物Ⅱ

- 1.4 SK-14
- 2.6 SK-12・下層
- 3.9~12 SK-16
- 5.23区包含層
- 7.8.24区包含層



#### IV. 第2次調査の概要

昭和59～60年にかけて実施した第2次調査の調査区は、先の第1次調査の北側であり、東西約10m×南北約100mの範囲で、30～52調査区にあたる。この部分は丘陵の北側端部に近いところであり、50～51区は比高約3.0mを経て水田に連なる斜面となっている。30～45区は比較的平坦な面であり、第1次調査で堅穴住居を検出した地点と同じように、尾根の最高所を占める位置であり、少なからず期待が持たれた。調査は10月1日に開始し、途中国体や別件の調査で2ヶ月あまりの中斷を余儀なくされたが年度内に終了することができた。調査面積は約650m<sup>2</sup>である。なお、B.M.ならびに地区割は第1次調査に共通させ、また、遺構番号は第1次調査分を含めて連番とした。

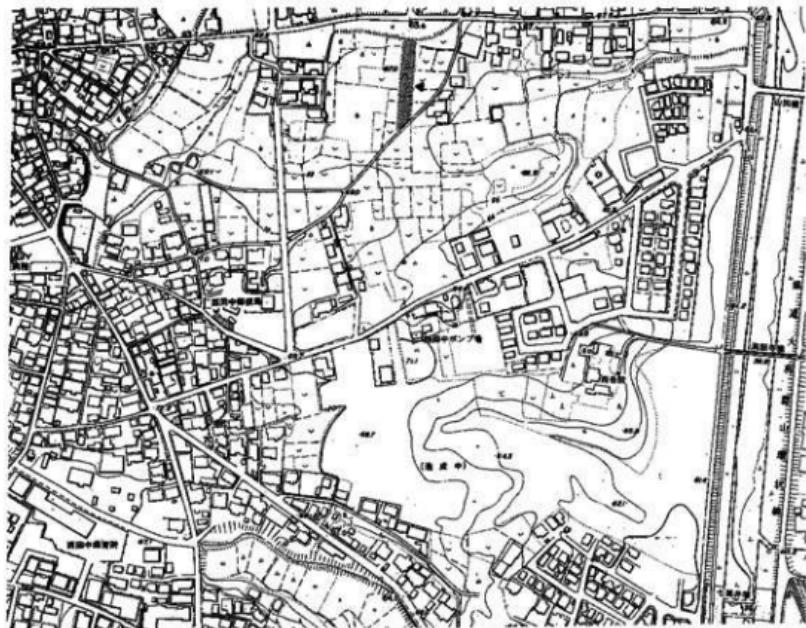


図8 第2次調査区

## 1. 遺構

第2次調査で検出した主要な遺構は、弥生時代の竪穴式住居・土坑・溝、古墳時代後期の溝等である。全区を通じてみた土層は、第1次調査時と同じで、包含層はほとんど認められず表土層直下の地山面で遺構を検出している。また、幅約1.0mの東西、南北方向の肥料溝によって擾乱を受けている部分も多かった。

S I - 0 3 は、径約8.0mの円形プランをもつ弥生時代中期後半の大形竪穴住居である。北側の周壁は高さ約0.4m遺存するが、南側では削平されほとんど残っていない。中央に二期にわたる炉がある。径約1.0m、深さ約0.4mをはかるスリ鉢状の断面をもつ。下部に約0.3m厚の灰層が堆積し、炉壁は硬く焼け結っている。いずれの炉からも幅約0.3m、深さ約0.2mの細長い外溝が南東方面にのびている。約8.0mにわたり検出したが、その断面は鋭い逆台形を呈する。住居址内部では多数の柱穴を検出している。径約0.3～0.4mのものが多く、深度は深いもので約0.8mをはかる。炉の状況や北東部に認められる周壁の拡張の状況からみて、数回の建替が行われていることがわかる。多数の柱穴もこの建替によるものであろう。主柱構造は、第1次調査で検出したS I - 0 2 と同様の構造で、炉の周辺に主柱穴を4本配し、さらにその周りに同心円状に支柱を配する構造と推定されるが、明確な復元案の提示は後日を期したい。覆土は暗褐色のひじょうに硬く締った土で、また遺物もさほど多くはない。北側の周壁溝から、凹線文と円形透孔をもつ台付鉢の脚部が出土した。

S I - 0 4 は、S I - 0 3 に後出する竪穴式住居で全体の約%を検出した。復元すれば径約7.5mの円形住居であろう。北側の周壁部は約0.4mの高さまで遺存する。炉は、径約0.8m、深約0.7mの円形地床炉であり、外溝は東側に展開する。炉址内の堆積はS I - 0 3 の炉と同じ状況である。住居の中央にはほど近いところに焼土・炭化物層が塊となって認められた。このS I - 0 4 の覆土には灰・炭化粒・焼土塊が比較的多く含まれていることが観察されており、罹災住居と考えられよう。柱穴はさほど明瞭ではないがS I - 0 3 と同じような構造を探るものと思われる。覆土内から第V様式の特徴をもつ土器が出土しており、後期まで存続するものと思われる。

溝 S D - 0 1 ・ 0 2 は、北東・南西方に伸びる幅約0.5m、深約0.1mの細溝で、2条が併走してトレーナーを斜行する。暗褐色土が堆積し、S D - 0 2 からは、TK-10型式の須恵器杯蓋の出土をみた。

土坑は18基検出した。平面形態・深度とともに一定せず、またその機能・用途も特定できない。遺物の出土も絶じて少ない方である。SK-22・25・28・30等は、径約0.8m、深約0.3mの円形土坑である。SK-21は幅約0.7m、深約0.3mの溝状の土坑で、生駒山西麓産の壺形土器、焼土塊などが出土している。SK-37・38は、集落の北限に近い位置で検出した不整形な土坑である。いずれも中期後半の土器片が少量出土したにとどまる。この40区から以北にかけては、遺構はきわめて少なく、ピット・土坑が数基検出されたにすぎない。45区～51区は、北側に向ってゆるやかに傾

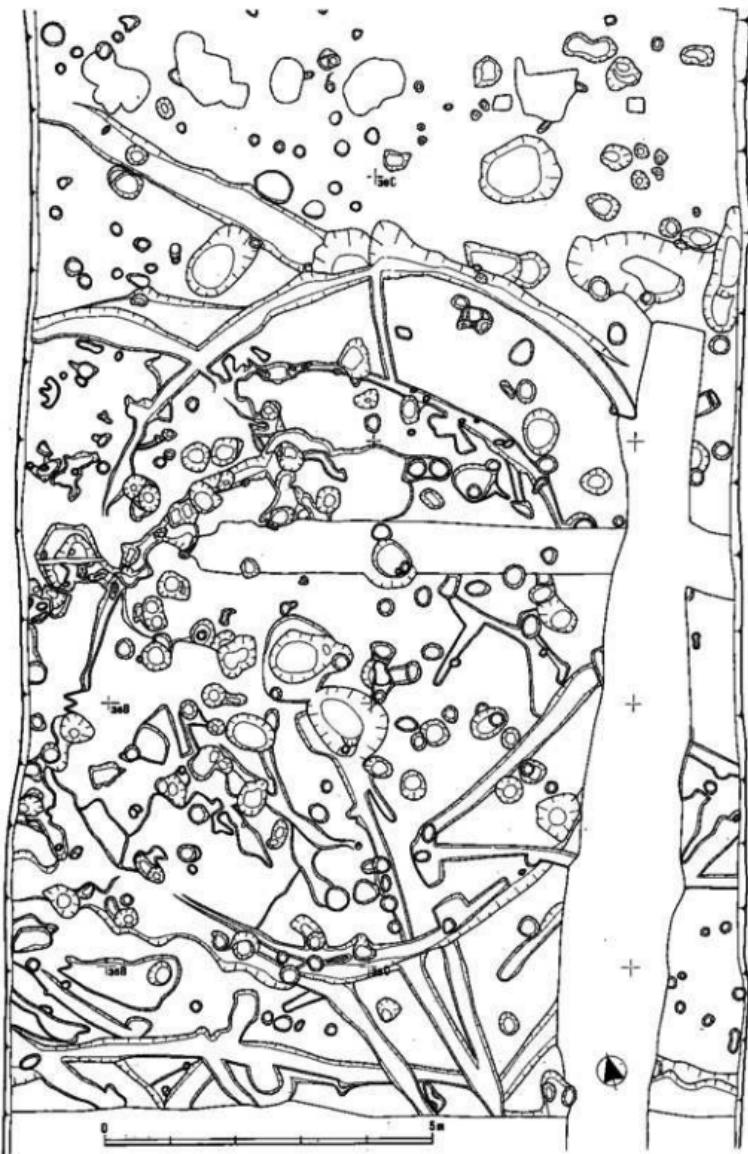


図9 SI-03・SI-04 平面図

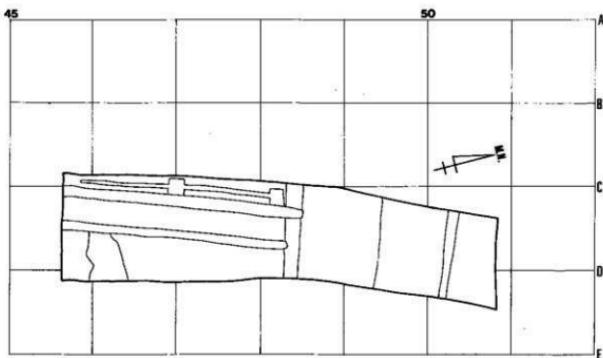
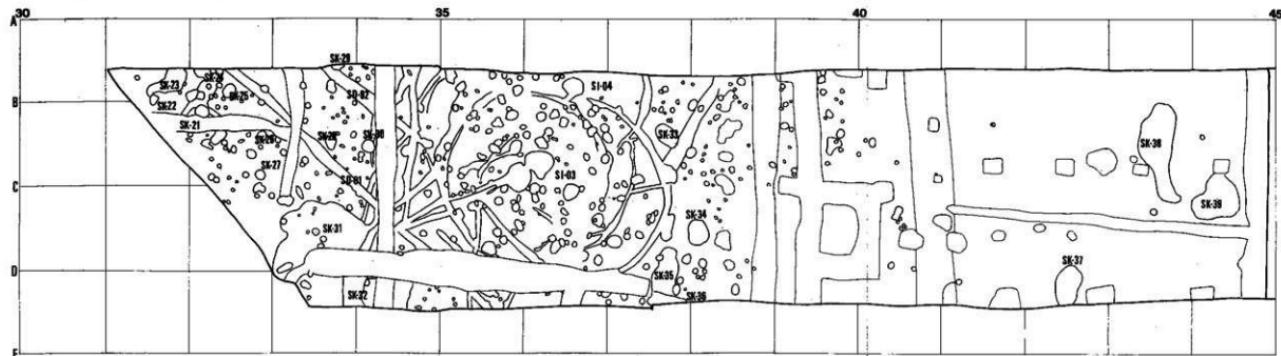


図10 第2次調査区内造構平面図（方眼は  $4 \times 4$  M）

斜する丘陵端部の自然地形であり、遺構は存在しない。集落の北限を限る施設はなかったようである。

## 2. 遺 物

第2次調査で出土した遺物は、通常のコンテナで約10箱程できわめて少なく、良好な資料も少ない。また、整理作業もほとんど進展していない状態なので、ここでは主だったものを報告するにとどめたい。

土器は図11に示す。

図11-1・2・5は、SK-21より出土した。1は、大形の広口壺で漏斗状に開く口縁部をもつ。口縁部は下方に垂下する。表面が剥落して調整はほとんど不明であるが、頸部に簾状文を施すようである。復元口径約33cm、茶褐色を呈する生駒山西麓産の胎土をもつ。2は、受口状の口縁をもつ壺の断片。復元口径約30cmを測る。口縁の上下両端部に列点文を施す。5は高杯の脚部で、根径約1.05cm。柱状部の下部を粘土板で充填し中空とする。根端部が上方に若干突出する。3はSK

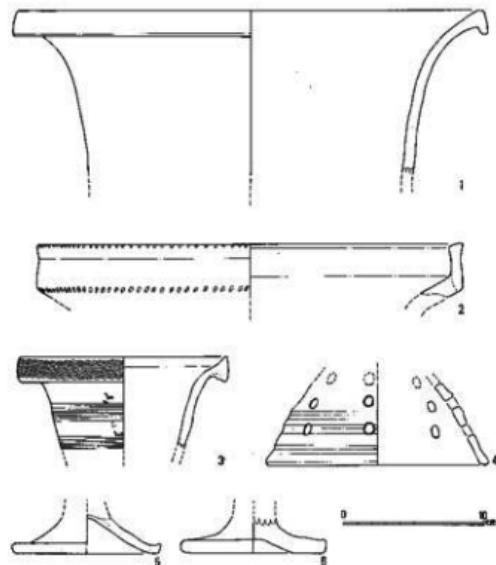


図11 第2次調査出土遺物 I. (1/4)

1. 2. 5 SK-21 3. SK-31  
4. SI-03周壁 6. SK-34

—31出土。漏斗状に広がる壺の口頸部で、口縁端部を上下片に拡張する。端面には粗い波状文、頸部には櫛描直線文を施す。頸部文様帶間に、細かいハケ調整が残る。生駒山西麓産の胎土をもつ。4は、台付鉢の脚部と思われる。S I—03の北側周壁溝から出土した。裾径約16cmを測る。下半部に幅広の凹線文を3条施した後、円孔は上下一直線に3個を配する。また、復元すれば8方向に穿っていたと思われる。凹線文と透孔が重なる例は少ない。6は高杯の脚柱部、裾部は部厚く水平に開く。柱状部は中実になると思われる。裾径約10.4cm。

石器は図12—1～6に掲載する。

1・2は、細身石槍である。1は全長約9.2cm、幅約2.5cmの完存品、刃部縁片の階段状剥離が著しい。2は先端部を欠損する。法量は1と同じくらいで、基部を抉るように調整する。3は凸基有茎鎌で、全長約3.8cm、幅約2.0cmを測る。1～3はいわゆるサスカイト製である。4は直線刃石包丁で紐孔が遺存する。刃部が相当磨り減っている。石材は緑泥片岩である。5は、花崗岩系の石材を用いた不整形な石器。蔽苔等として使用されたものであろう。6は長約12cm、幅約8.5cmの叩石である。

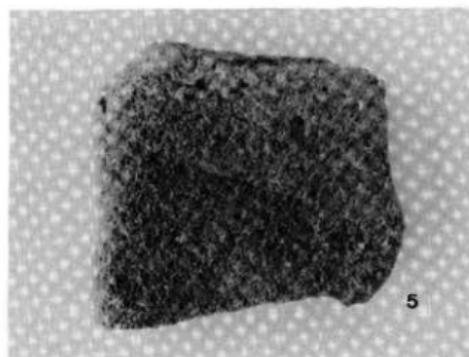
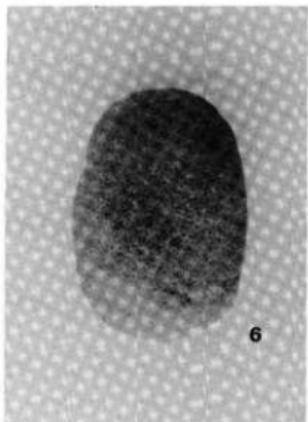
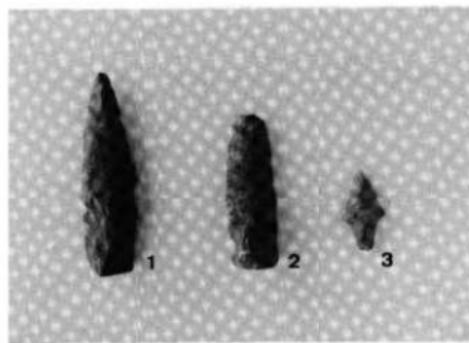


図12 第2次調査出土遺物 II

1. S I - 0 3
2. 33区表採
3. 4 SK - 38
5. SK - 32
6. SK - 21

## V. まとめ

富雄川下流域の西側に広がる矢田丘陵東南麓部一帯には從来から幾つかの弥生時代の遺跡の存在が知られていたが、実体の不明なものが多く、その集落遺跡の成立から廃絶に至る様相などは断片的に知れる程度であった。こうした状況の中で、今回の西田中遺跡における2次にわたる発掘調査によって、遺跡の実体がその一部ではあるものの明らかにされたことは、当該地一帯の弥生遺跡の動態を考える上で資するところが多いと思われる。向後に残された問題は多いが、これまでの成果を以下、簡単にまとめておきたい。

- ① 西田中遺跡は、水田面との比高約5~10mをはかる低丘陵に立地する丘陵性遺跡であり、集落の經營は中期一後期（第Ⅲ—V様式）におよぶ。
- ② 居住区は、東側に向ってのびる細尾根の高所に設定されており、谷状地形の部分を避けている。2支群の住居群を検出したが、おそらく集落自体が複数の支群から構成されていたと思われる。集落の南限と北限については把握できたが、東西の領域は不明である。
- ③ 住居は大形の堅穴住居で、県下でも類例が少ない。地床炉と炉から周壁外までのびる外溝が特徴的である。この外溝は、丘陵性の遺跡に多いことが指摘されている。本例は確実に中期後半まで遡上しうる例であり、畿内での初現例として住居構造の変遷やその地域性を考えるうえで良好な資料となろう。
- ④ 周辺に存在する他の遺跡、小泉遺跡・六道山遺跡・慈光院裏山遺跡なども弥生中期一後期にかけて成立した遺跡であり、西田中遺跡を含めてこうした小規模な集落が分散する形で一つの丘陵性の遺跡群を形成していたと推定される。
- ⑤ 西田中遺跡が廃絶してから約3世紀後、小規模な集落が営まれるか詳細は判然としない。この時期の溝は、慈光院裏山遺跡でも検出されている。また、この古墳時代後期以後には集落は形成されないようである。

以上のように、遺跡の実体を把握するには周辺地域一帯の調査の進展を待たねばならないが、奈良盆地内では類例の少ない丘陵性遺跡の様相が明らかとなった点は一つの成果に上げられよう。ところで、この西田中遺跡周辺には多くの弥生時代の遺跡が存在し、また最近大規模な調査が実施された遺跡もあるので、こうした成果を概観する中で、西田中遺跡の持つ意義について触ると同時に、最後のまとめとしておきたい。

富雄川の下流域で現在まで弥生土器が出土している遺跡は、城遺跡・外川遺跡・古屋敷遺跡・六道山遺跡・小泉遺跡・菩提山遺跡などであり、他に富雄丸山古墳・割塚古墳・東狐塚古墳の調査中に墳丘盛土内から弥生式土器が検出されており、古墳近辺に遺跡の存在が推定してきた。これら多くの遺跡は丘陵端の現水田面との比高差がさほど顕著ではない立地を採っている。また出土土器も中期一後期にかけてのものが多く、前期段階まで遡る例は現在までのところ知られていない。お

そらくは中期以降に卓越してくると考えられている集落の分村化に伴う小規模な集落址であろうか。  
狹谷をねって流れる富雄川の流域面積の狭さや、本庄杉町遺跡の調査結果や遺存地割から推定されている富雄川下流域の河道変遷や氾濫という環境因も、こうした丘陵性遺跡群の成立に何らかの影響を与えていたと思われる。ところで、近年こうした丘陵性遺跡の東側隣接地で2件の大規模な調査が実施されている。満願寺遺跡と法起寺南遺跡である。満願寺遺跡は、西田中遺跡の東約0.7kmに位置し、県立片桐高校の建設に伴い調査が実施されている。検出遺構は、弥生後期の住居址、古墳時代中期後半の溝等であり、特に5世紀後半を示す遺構が多いとされている。法起寺南遺跡は、地場産業育成のための工業団地造成に伴い調査が実施され、古墳時代前期の掘立柱建物から成る大規模な集落であることが判明している。このように、富雄川の下流域においては、現在までのところ古墳時代に入ってから遺跡の形成が著しく、生活圏の中に取りこまれていく様子が窺えるが、こうした状況も当該地の弥生遺跡の動向と少なからず関連しているように思われる。この富雄川水系の中で弥生時代の拠点となる遺跡が発見されていない現時点では、こうした丘陵性の遺跡に対して明確な意義付けは難しいと思われるが、比較的小規模な集落が分散する形で成立しており、またその経営も中期から後期にかけての長い範囲に及ぶこと、あるいは先に述べた満願寺遺跡や法起寺南遺跡にみられる古墳時代以降における土地利用の活性化などの点から推測すれば、こうした西田中遺跡をはじめとする多くの弥生時代遺跡に対しては、流域の小可耕地を生産の基盤に据えた小規模な農耕集落とする見方が穩当とも思われる。ところで、平地性遺跡と丘陵性遺跡という立地条件からみた遺跡の分類は、特に後者については比高差などの要素を一つの分別の基準に援引することにより、より細かい分類と性格付けが行われており、高地性集落に関わる難しい論議がかわされている。当該遺跡群も県下でも例の少ない一定のまとまりを持った丘陵性遺跡群として位置づけることができると思われるが、遺跡の立地・比高という地理的な要件によるかぎり、きわめて表相的な把え方ではあるけれども、第②類型内のさらなる細分例の一つとして借定することも可能であるかもしれない。ただ、こうした分類が幾分でも有効性をもつには、遺跡自体の性格についての精査が必要であり、外的な環境因からみた場合の一つの類型内に収まる個々の遺跡が、はたしてその遺跡の属性一経営期間・集落構造・土器組成・石器組成一からみてもそこに相互に共通した型を認めるかどうかは別次元の問題でもあると思われる。いずれにせよ情況証拠が不完全な現時点ではこうした見方も推測にとどまるものであり、遺跡の性格に関してはより多くの事実関係の整理と分析を経るまで保留しておきたい。

#### 付載 1. 六道山遺跡採集の弥生式土器

昭和59年6月、市立片桐西小学校の生徒が採集し同校に仮保管されている土器を実現・実測する  
機会を得たので、付載の意味で報告しておきたい。

遺物はすべて弥生式土器で、大小合わせて縦断片数約50点を数える。採集地点は、富雄川下流域の大形古墳として知られる六道山古墳の墳丘西側の崖面である。この六道山古墳後円部周辺は、すでに宅地造成によって地表面が數mにわたって削平されている。開発に先立って周濠の確認を目的とした試掘調査が実施され、南側へ緩慢に傾斜する谷状地形と中世の包含層が検出されている。註9

さて、後円部西側の崖面の断面観察によって出土位置を明らかにすることができた。それによると、六道山古墳の後円部は盛土で築造されており、黄色砂質土が築成土の主体を成している。その盛土下に厚さ約1.0mにわたる暗褐色土が堆積している。これが弥生時代の包含層であり、現状でも土器片を探集できる。包含層は、後円部をとりまくように南北約15mにわたって確認できる。暗褐色土中には黄色の地山流出土が部分的に堆積している。規模の大きい溝状遺構の縦断面の可能性もある。

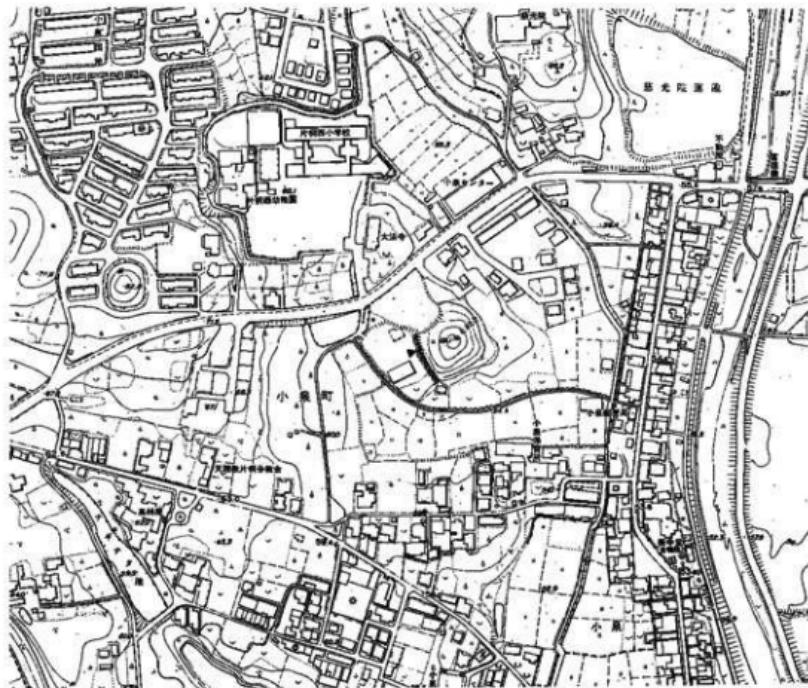


図13 六道山遺跡位置図

るが、現状では北側の丘陵からの流入土によって形成された包含層とみなしておるのが妥当であろう。この暗褐色土は、西田中遺跡における遺構埋土に共通する。包含層の下は矢田丘陵を構成する黄色粘質土である。

確認できる器種は、壺・甕・高杯で、内図示できるのは底部破片に限られる次の11点である。

(図14-1~11)

いずれもゆるやかに外上方にのびる体部をもつ平底の底部断片であるが、4が若干上げ底気味であり、また9は丸みをおびている。底径4cm前後のもの(1~3, 9~11)が多く、5は底径約8.0cmと大形である。成形・調整痕が良好に遺存するものは少ないが、外面を底部ぎりぎりの部位から右上りのタキで調整する例(1・3・4・6・11)が多い。1の内面には右回りに施された籠状のハケ目が残る。

以上、報告できる個体数は少ないが、そのほとんどが畿内第V様式の範囲で把えられるであろう。ただ、5は中期に遡る可能性があり、また採集土器片の中には櫛描直線文をもつ破片もあり、中期の土器も若干含まれるものとみなしておいた方が妥当であろう。今回の発見によりこの一帯が後期にまでおよぶ丘陵性の遺跡群であることが判明した点は大きな成果であろう。

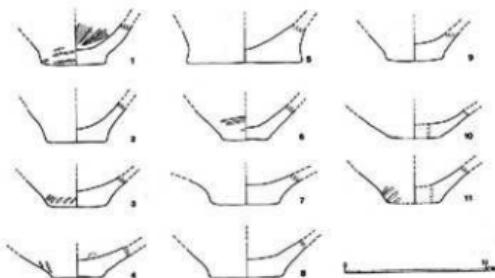


図14 六道山遺跡採集土器実測図(1/4)



図15 六道山遺跡採集地点

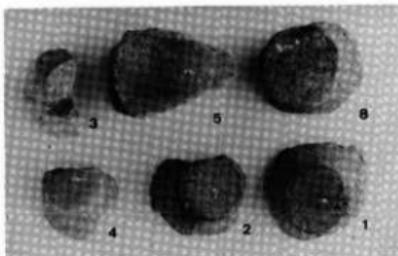


図16 六道山遺跡採集土器

番号	器種	法量 (ml)	形態	色調	備考
1	底部	底径約 4.0	・平底 ・外面上にタタキ目、内面に原休幅約 2.0 cm の縦状 ハケ目	・橙色	
2	"	4.0	・平底 ・外面上にタタキ目が若干残る、内面はナテ調整	・淡黄褐色	・底部の一部に黒斑
3	"	3.9	・平底 ・外面上に右上りのタタキ目、内面は黒斑のため不明	・淡黄褐色	・底部の一部に黒斑 ・残約 1/4 反転復元
4	"	3.2	・若干上げ底氣味 ・外面上の一部にタタキ目が残る ・内面には爪先状の圧痕	・底部外面褐色 他は淡黄褐色	・残約 1/4
5	"	8.0	・平底 ・磨拭のため調整不明	・淡褐色	
6	"	3.0	・平底 ・外面上に右上りのタタキ目 ・内面にはナテ調整	・内面淡黃灰色 ・外面黒灰色	
7	"	5.0	・外面上はタタキで整形、内面調整は不明	・淡灰黑色	・残 1/4 反転
8	"	5.0	・平底 ・外面上に薄くタタキ目残る、内面は不明	・淡茶褐色	
9	"	4.0	・若干丸底	・淡茶褐色	
10	"	3.8	・平底 ・調整不明	・淡黄褐色	
11	"	3.8	・平底 ・外面上に荒いタタキ目	・淡灰茶色	

表 1. 六道山遺跡採集土器観察表

註

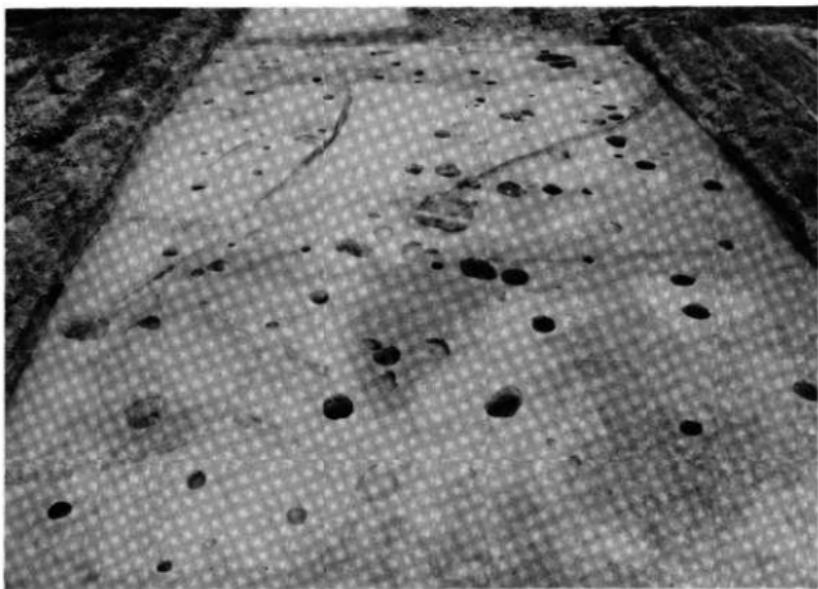
- 註① 奈良県教育委員会『奈良県遺跡地図』第1分冊改訂 昭和58年
- 註② 碇口清之「大和法隆寺村発見の縄文式土器」（『大和志』第4巻第5号）昭和12年
- 註③ 寺沢薰「慈光院裏山遺跡採集の石器」（『青陵』第38号）昭和53年  
泉武「慈光院裏山遺跡調査概報」（『奈良県遺跡調査概報』1977年度）昭和53年  
泉武「慈光院裏山遺跡出土の須恵器」（『青陵』第41号）昭和54年
- 註④ 小島俊次「考古学的考察」（『大和郡市史』）昭和41年
- 註⑤ 藤井利草「満願寺遺跡発掘調査概報」（『奈良県遺跡調査概報』1982年度）昭和58年
- 註⑥ 長谷川俊幸「小泉遺跡発掘調査概報」（『奈良県遺跡調査概報』1982年度）昭和58年
- 註⑦ 久野邦雄・寺沢薰「六条山遺跡」（『奈良県文化財調査報告書』第34集）昭和55年
- 註⑧ 伊達宗泰「小泉孤塚・大塚古墳」（『奈良県史跡名勝天然記念物調査報告』第23冊）昭和41年
- 註⑨ 白石太一郎「六道山古墳」（『奈良県の主要古墳Ⅰ』）昭和46年
- 註⑩ 北野耕平「斑鳩大塚古墳」（『奈良県史跡名称天然記念物調査抄報』第10輯）昭和33年
- 註⑪ 久野邦雄・泉森鉱「富雄丸山古墳」（『奈良県文化財調査報告書』第19集）昭和48年
- 註⑫ 久野邦雄・関川尚功「斑鳩町瓦塚1号墳発掘調査概報」昭和51年
- 註⑬ 中井一夫「斑鳩町戸垣山古墳の測量調査」（『青陵』第27号）昭和50年
- 註⑭ 小島俊次「割塚古墳の調査」（『青陵』第14号）昭和44年
- 註⑮ 伊藤勇輔「東孤冢古墳」（奈良県文化財調査報告書第28集『奈良県古墳発掘調査集報Ⅰ』）昭和51年
- 註⑯ 末永雅雄「日本の古墳」昭和36年
- 註⑰ 久野邦雄・関川尚功「斑鳩町三井の古墳群について」（『青陵』第31号）昭和51年
- 註⑲ 東潮「葦尾古墳発掘調査概報」（『奈良県遺跡調査概報』1981年度）昭和58年
- 註⑳ 河上邦彦・関川尚功「斑鳩・仏塚古墳」昭和52年
- 註㉑ 泉森鉱「竜田御坊山古墳」（『奈良県史跡名勝天然記念物調査報告』第32冊）昭和52年
- 註㉒ 藤井利草「酒ノ免遺跡発掘調査概報」（『奈良県遺跡調査概報』1981年度）昭和58年
- 註㉓ 伊藤勇輔「法起寺南遺跡の調査」（『奈良県遺跡調査概報』1982年度）昭和59年
- 註㉔ 稲垣哲也「旧中宮寺跡の発掘と現状」（『日本歴史』第299号）昭和48年
- 藤井利草「中宮寺跡発掘調査概報」（『奈良県遺跡調査概報』1982年度）昭和59年
- 註㉖ 関川尚功「松尾寺の発掘」（『大和松尾寺の歴史と文化』）昭和54年
- 註㉗ 岸熊吉「三井窯及額田部窯址調査報告」（『奈良県史跡名称天然記念物調査報告』第13冊）昭和10年
- 註㉘ 村田修三「小泉城」（『日本城郭大系』第10巻）昭和55年
- 註㉙ 山土土器については、松本洋明氏（奈良県立橿原考古学研究所）より多くの御教示を得た。記して感謝いたします。
- 註㉚ 註③に同じ。
- 註㉛ 註⑦、及び大阪文化財センター『東山遺跡』（『大阪府文化財調査報告書』）昭和55年
- 註㉜ 寺沢薰「本庄・杉町遺跡試掘調査報告」（『奈良県遺跡調査概報』1979年度）昭和56年
- 註㉝ 奈良県企画部開発調整課「土地分類基本調査 桜井」昭和57年
- 註㉞ 註⑤に同じ

- 註⑧ 註⑦と同じ
- 註⑨ 寺沢薰「大和の高地性集落」（『青龍』第36号）昭和53年
- 註⑩ 註⑨と同じ
- 註⑪ 遺物実査・現地踏査に際し、奈良県立橿原考古学研究所・菅谷文則学芸室長ならびに大和郡山市立片桐西小学校・星野知子教諭に多くの御教示と協力をうけた。記して感謝いたします。
- 註⑫ 寺沢薰「六道山古墳周辺試掘調査報告書」（『奈良県遺跡調査概報』1981年度）昭和58年

図版 1 西田中遺跡第1次調査

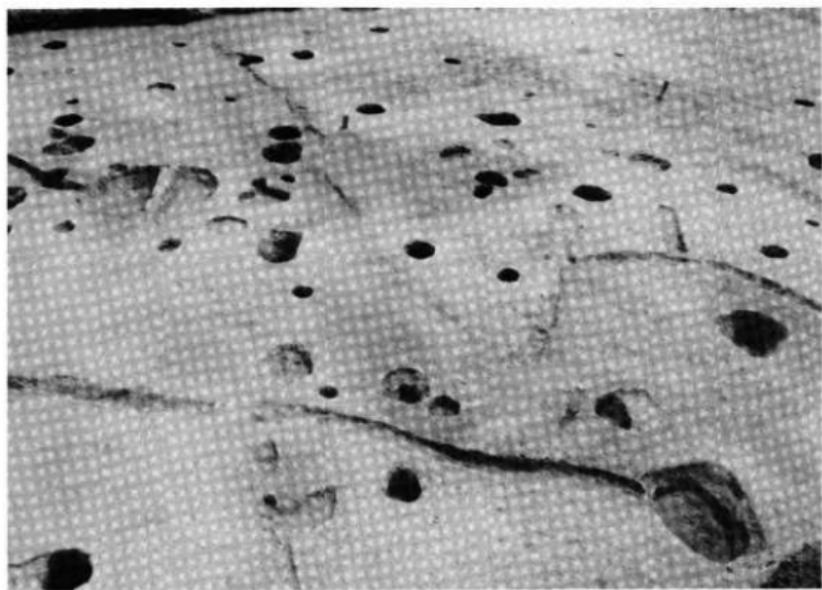


a) 調査区前景 (南から)



b) SI-01・SI-02 全景 (南から)

図版2. 西田中遺跡第1次調査



a) S I - 01・S I - 02 細景（北西から）

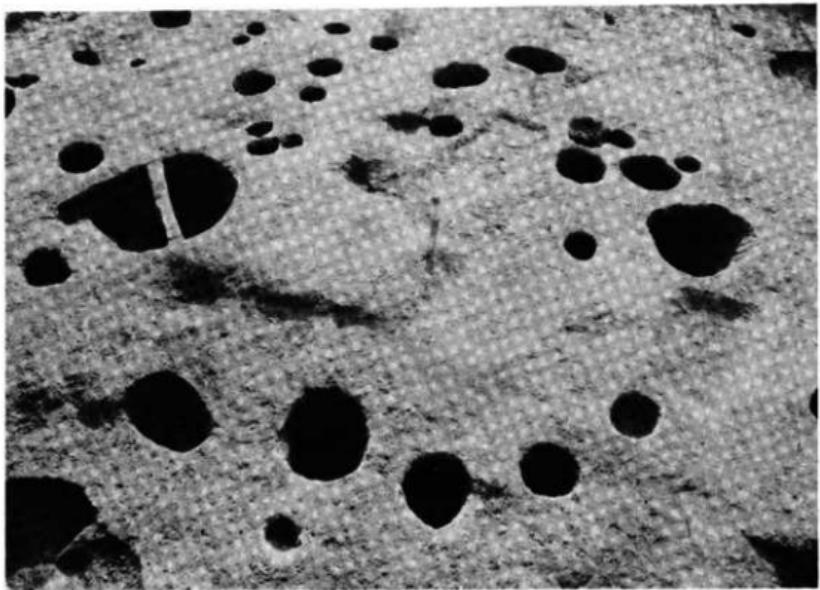


b) S K - 12 土層堆積状況（西から）

図版 3. 西田中遺跡第1次調査



a) 20~25区全景（北から）



b) 24~25区ピット群（北東から）

図版4  
西田中遺跡第2次調査



a) 調査区前景（南から）

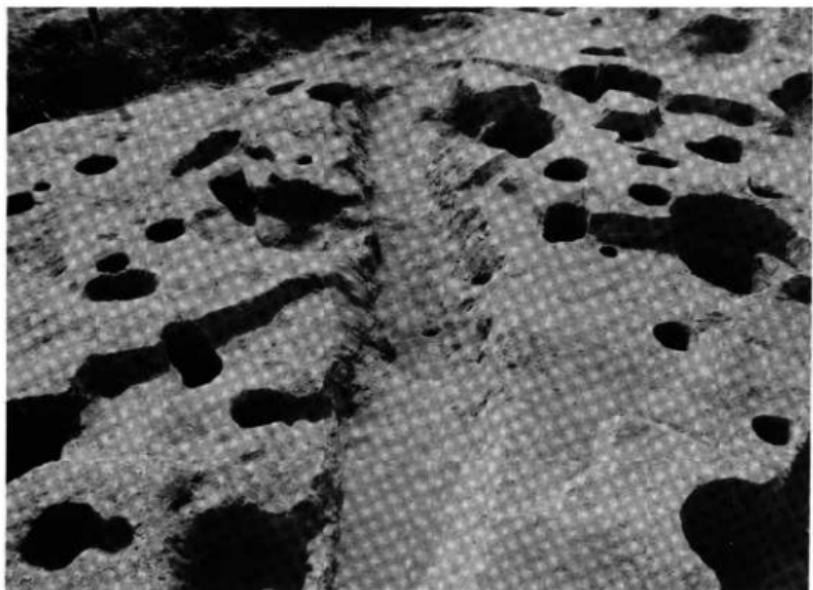


b) 調査風景

図版5 西田中遺跡第2次調査



a) SI-03 + SI-04 全景（北から）



b) SK-21 全景（北から）

図版 6. 西田中遺跡第2次調査



a) SI-03 周壁部（北西から）



b) SI-03 炉址断面（北から）

大和郡山市文化財調査概要 4.

西田中遺跡

第1・2次発掘調査概要報告

昭和60年3月31日

編集発行 大和郡市教育委員会  
大和郡山市北郡山町 248-4

印刷 金井平版印刷  
大和郡山市北西町 227

